



Title	<書評>宇野瑞木著：『孝の風景—説話表象文化論序説』
Author(s)	佐野、大介
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 244-246
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70155">https://doi.org/10.18910/70155</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 書評・宇野瑞木著

### 『孝の風景——説話表象文化論序説』

佐野大介

本書は、平成二四年に提出された著者の博士学位論文を基に出版されたもので、東アジア社会に長い間大きな影響力を及ぼしてきた「孝」という考え方に関する、「孝子説話」をめぐる諸現象を、音声・図像・文字テクスト・身振りといった具体化されるもの、さらにそれを超えつつ結びつける力として理解し直すことによって、説話表象としての全体像を把握することを試みたものである。考察の対象は前近代までの中国と日本及び一部韓国に及ぶ。

本書では、「表象」というキーワードを中心に議論が展開するが、この語は、本書が、メディアや研究ジャンルを横断的・学際的に捉えつつ、説話をめぐる諸現象を

その関係性より理解し、その背景や構造をも考察の対象としていることを象徴している。従来の孝子説話研究では、多くの研究成果が蓄積されてきた一方で、その連携は必ずしも十分なものではなかった。ために本書は、各分野の研究と研究をつなげ、その隙間に光をあてるこことを意図している。

以上の方針を、本書では「説話表象文化論」と称している。説話研究の土台となるのは図像や文字テクストなどの二次元的資料であるが、本書では、説話をめぐる諸資料やそれに関する研究を、三次元的な局面を想定することにより、次元をステップアップさせて総合化することが試みられている。本書の「序」に、「説話研究の

三次元化にむけて」という副題が附されていることがこれを象徴しているよう。

本書の構成としては、第一部「図像の力」、第二部「語りの生起する場」、第三部「出版メディアの空間」の三部に、序論、結論「孝の表象—波うち際にて」が附される。

第一部「図像の力」においては、孝子説話の図像の力に着目し、それが墓という死者儀礼の空間においていかなる機能を果たしていたか、という問題を中心的に論じる。

第一章「後漢墓における孝の表象」では、後漢の武梁祠堂画像石を取り上げ、その祠堂に施された諸々のモティーフの関係性や各機能を再解釈する。そして、墓には、儒教的秩序の再編というだけではおさまらず、そこからはみ出るようなローカルな信仰形態や個人的な思想が表出していることを指摘する。

第二章「六朝時代以降の孝子図」では、六朝時代の墓域における孝子図に注目し、孝子図は、漢墓においては表象すべき人物像としての意味が強かつたが、六朝時代以降、三教や外来宗教における死後の楽土へと墓主を導く呪術性を持つようになったと述べる。

第三章「孝子伝図から二十四孝図へ」では、漢代以来の孝子伝図から宋金元墓の二十四孝図までの図像を対象

にモティーフの分析を行ない、各種徳行の表象の根幹として孝子表象が独立し、孝子（男子）から親へのベクトルが強調されていく様子を明らかにする。

第二部「語りの生起する場」では、二十四孝の語られる説話としての側面に着目し、説話の可変的要素を分析することにより、説話がその時・場にいかに語られ、機能したかを検証する。

第四章「郭巨説話の母子像」では、郭巨説話を取り上げ、二十四孝の生成に、仏教の報恩思想の言説の痕跡が見られることを指摘する。

第五章「郭巨説話の「母の悲しみ」」では、追善供養の場で用いられた安居院流唱導のテクスト分析を通して、日本において郭巨説話が「母の悲しみ」の物語として享受されていく様子について述べる。

第六章「日本中世の追善供養の場と孝子説話」では、『金玉要集』に見える孟宗説話を中心に分析し、孝子説話が漢詩文や和歌の註釈世界、さらに物語や絵画との緊密なやり取りの中で独自の展開を遂げていった様子を示す。

第三部「出版メディアの空間」では、江戸期の出版文化を中心とした孝子説話の図像に関する問題を取り上げる。

第七章「和製二十四孝図の誕生」では、日本の渋川版

二十四孝の図像と中国・朝鮮の図像とを比較し、渋川版に見られる、渡来テキストからのモティーフおよび構図の摂取、あるいはモティーフの改変・付加について検証する。

第八章「蓑笠姿の孟宗」では、孟宗図に見える孟宗が、日本において文人姿から蓑笠姿へと変容してゆく過程を調査し、そこに含まれた意味について考察するとともに、二十四孝図の原型形成に五山僧達が関わっていた可能性を指摘する。

第九章「江戸期における二十四孝イメージの氾濫／反乱」では、『本朝二十不孝』、黄表紙『二十四孝安壳請合』や見立て図を取り上げ、孝行図像における孝の世俗化や記号化について考察する。

結論では、これら三部で扱った三方面から多角的に光を当て直すことによって姿を現わす二十四孝の表象の条件として、1、遡及的時間性、2、感通性、3、伝達される文化であること、4、真似ること・リアクションの四点を挙げ、機能という観点より、1、模範性・自立性としての機能、2、吉祥性・感通性としての機能、3、個人化・内発性を促す機能の三点を指摘している。

従来、孝思想研究は、文学・思想方面より行なわれるものがその殆どを占めてきた。これに対しても本書は、孝

子説話に対し、考古学・文学・思想・美術・文化といつたさまざまな角度から多角的・総合的に考察検討を加えたものであり、孝子説話研究のみならず、文献のみを対象としたしがちであった従来の思想研究のあり方にも一石を投じる研究であるといえよう。

今後の展望に関して、著者は自身で、「別の地域（南方諸島や台湾、韓国、ベトナム、モンゴル、シンガポールなど）」に言及し、「より視野を広げ」「分析の精度を高めていきたい」（結論）として、多分野・多表象の比較、更には多地域の比較に関しても意欲を示している。これは、本書を読了した者、誰もが望む本研究の発展型といえよう。さらなる研究の発展を期待したい。

また、本書の末尾には「基礎資料編」として、数多くの二十四孝に関する図像が、日本の近世初期の二十四孝の標準といえる版本挿絵二種（I）、渡来版本の挿絵（II）、漢から宋元明金墓の孝子図（III）、室町から江戸初期にかけての屏風等大画面製作およびお伽草子類（IV）に分類して掲載されている。孝子図像の変遷過程を概観できる資料として、今後の孝子伝図研究を大いに裨益するものといえよう。

（勉誠出版、二〇一六年二月刊、本文七七二頁、一六二〇〇円）